

「自己選択」「自己決定」のデイサービスプログラムに関する研究

—「夢のみずうみ村A」を事例として—

A Study on “Self-Selection” and “Self-Determination” in the Adult Day Care Services Program — A Case Study on “The Dreams Lake Village A” —

加藤 玲子*, 小城 百代*
Reiko Katou, Momoyo Kojyo

*鹿児島女子短期大学

通所介護（以下「デイサービス」という）は、施設の用意したデイサービスのプログラム（おりがみや輪投げなど）を利用者（デイサービスの利用者、以下「利用者」という）全員で、同じことを行うことが多い。

介護保険制度は、その人らしき尊厳の保持するために「自己決定」を尊重しているが、福祉サービスのなかで、サービスを利用する個人の「自己選択」「自己決定」は、まだ、十分だと言えない。K県M市にある「夢のみずうみ村A」デイサービスは、利用者がその日のデイサービスのプログラムを自分の興味・関心で「自己選択」「自己決定」している。

本、調査・報告は利用者へアンケート調査を行い「自己選択」「自己決定」の満足度などの評価を行った。その結果、「自分のことは自分で決めたい」と自己選択を評価している。また、同施設は、施設内に意図的に段差等のバリアを設置しているが「バリアがある」（以下「バリアあり」という）ことについても、利用者は「自宅と同じなので不安はない」と自宅の環境を克服するためとして施設内バリアを評価している。

キーワード：夢のみずうみ村、自己選択、自己決定、ユーマ、バリアあり

I. はじめに

内閣府発表の「平成28年版高齢社会白書」によると、我が国の総人口は平成27（2015）年10月1日現在、1億2,711万人で、65歳以上の高齢者人口は3,392万人となっている。これに伴い高齢化率も進展し、総人口に占める65歳以上人口の割合は26.7%となり、平均寿命は、平成26（2014）年、男性80.50年、女性86.83年である。

現在、特別養護老人ホームをはじめとする公的介護施設の入居者受け入れ数も限界に達し、入居者待ちが多くみられる。このような現状の中で、国の方針としても「住み慣れた地域で長く安心して暮らす」ために、在宅サービスの利用を推し進めている。高齢者自身も身体機能の維持とリハビリのために、また、社会的交流を求め、在宅サービスであるデイサービスの利用者が増えている。

厚生労働省発表の「平成25年介護サービス施設・事業所調査の概況」によると、介護予防通所介護事業所数は36,097事業所となっており前年に比べ3,665事業所の増加となり、介護予防サービスのなかで、最も高い増加率（比率11.3%増）となっている。

居宅サービス事業所の通所介護も38,127事業所で前年より4,020事業所が増加し、増加率も11.8%と居宅サービス事業所のなかで最も高い数値となっている。¹⁾

居宅サービスの中で最も増加率の高く身近なサービスであることから、サービスの質の評価の検討が必要であると考えられる。

また、戦後生まれの高度経済成長期に育った現高齢者は、多種多様な価値観を持ち高学歴者も多い。利用者の満足感を得るためにも今、介護現場の質の向上が必要とされている。

II. 研究の目的と方法

本研究は、施設側が用意したプログラムをデイサービス参加者全員が同じことをするのはなく、利用者自身が興味・関心のある内容を選ぶ個性を尊重した「自己選択」「自己決定」はどうあるべきかを調査・報告をするものである。

また、高齢者の転倒予防のためにバリアフリーが一般的であるが、あえてバリアを取り入れたバリアありについても知見を得るものである。

III. 調査の対象と概要

1. 「夢のみずうみ村」について

「夢のみずうみ村」はフランチャイズ事業として全国展開している施設である。多くのデイサービスの施設内はバ

リアフリーとなっているが、調査対象であるデイサービス施設「夢のみずうみ村」は、施設内に意図的に段差や坂、タンスなどを置き、日常で遭遇する可能性のあるバリアを設け、リハビリを目的とした施設である。ここを利用する利用者は、在宅生活を継続したい、人生現役で過ごしていきたいと思っている人が多く、バリアがある状態で過ごすことで、自然とリハビリに繋がっている。

「夢のみずうみ村」の特徴は、①前述したように施設内に日常で遭遇する可能性のあるバリアを意図的に配置した「バリアアリー」施設である。②「one step one goods」一歩先にさわるもの・すがるもの・寄りかかるものが必ず最低1つ以上ある環境になっている。③昼食は「バイキング形式」になっており、利用者一人一人にマイ茶碗、マイ箸、マイ湯呑が準備され、広場中央に大皿に入れて並べてある食事を自分の食器に盛り付け、トレイに乗せ席まで運んでいる。④デイサービスに到着後、その日の自分の行動・プログラムを決め、マグネットプレートプログラムボードの時間枠にはり付けていくことで、「自己選択・自己決定」を促している。⑤「宅配リハビリテーション」として、利用者自身によって宅配された「動作方法」や「制作物等」によって、利用者自身はもとより、家族構成員皆の暮らしや生き方が安定し、安心し、豊かになるリハビリテーションを行っている。⑥施設内では、村内通貨「YUME (ユーメ)」を使い、各プログラムに参加する時はユーメを支払い、リハビリやカジノ、見学者の案内や内職等でユーメを稼ぐ仕組みになっている。⑦覚醒プール(ウエイキングプール 特許第3524843号)を利用し、体力づくりをしている。^{註1)} ⑧「師範・師範代制度」では、利用者が先生となって他の利用者を指導する教室がいくつかある。^{註2)} 以上①～⑧までの内容である。

平成28年現在、全国の加盟施設は、山口県、千葉県を筆頭に北海道、岩手県、鹿児島県、沖縄県等13施設あり、台湾に1施設ある。「人生に定年はない」の理念のもとに、様々なメニューを展開しており、「人生の現役養成道場」の看板を掲げ、「また行ってみたいくなるデイサービス」として堅実に信頼を得て全国、海外に広がってきている。²⁾

2. 調査対象施設、調査対象者

2-1. 「夢のみずうみ村A」デイサービスの設立について

K県M市にある平成4年にKデイサービスセンターを開設、その後、平成21年に「夢のみずうみ村Aデイサービス」(以下「夢のみずうみ村A」という)フランチャイズ事業に変更。本研究では、「夢のみずうみ村A」に平成25年12月21日から、平成26年1月6日に訪問し、利用されている62名の利用者は無記名式でアンケート調査し、その場で回収した。

2-2. 「夢のみずうみ村A」の利用者の介護度について

「夢のみずうみ村A」の利用者の介護度は、要介護度1が18名、要介護度2が17名、要介護度3が10名、要介護度4が6名、要介護度5は0名であり、要支援1が4名、要支援2が7名である。(図1)

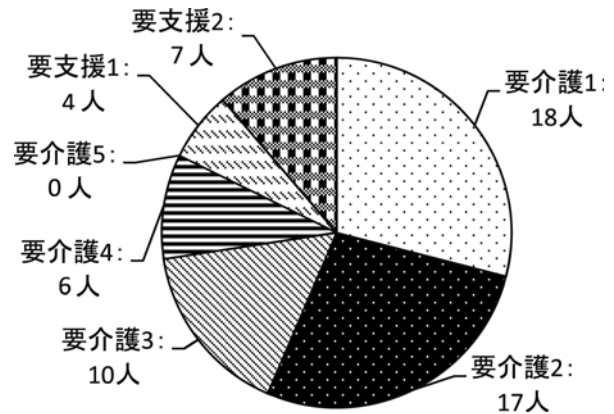


図1 利用者の介護度(単位:人)

IV. 調査結果と分析

1. 回答者の概要

1-1. 利用者の年齢

回答者59名の年齢は無回答3名を除いて、65歳から74歳の前期高齢者が5名、75歳以上は全体の51名で、本デイサービス利用者の91%が後期高齢者である。85歳以上が33名と多く、90歳以上は13名であった。(表1)

表1. 利用者の年齢層(単位:人)

性別(人)	男13	女46
年 齢 (人)		
65～69歳		3
70～74歳		2
75～79歳		7
80～84歳		11
85歳以上		33
無回答		3

1-2. 利用回数と利用年数

一週間の利用回数は、デイサービスが開かれている週6回来ている利用者は2名、週1回の利用は7名である。利用回数の最も多いのは週2～3回の利用で、全利用者の約74%を占めている(表2)。利用年数については、半年満は11名で全体の22%で、1年未満12名の24%であり、1年未満の利用者は全体の45%である。「夢のみずうみ村A」デイサービスの開始時期頃から続けてきている利用者も7名、(11%)いる。また、その他の中には10年未満と答えた利用者が1名いた。(表2, 図2)

表2. 1週間の利用回数と年数(単位:人)

1週間利用回数(人)		利用年数	
6回	2	半年未満	11
5回	3	1年未満	12
4回	3	2年未満	5
3回	22	3年未満	5
2回	22	4年未満	3
1回	7	5年未満	7

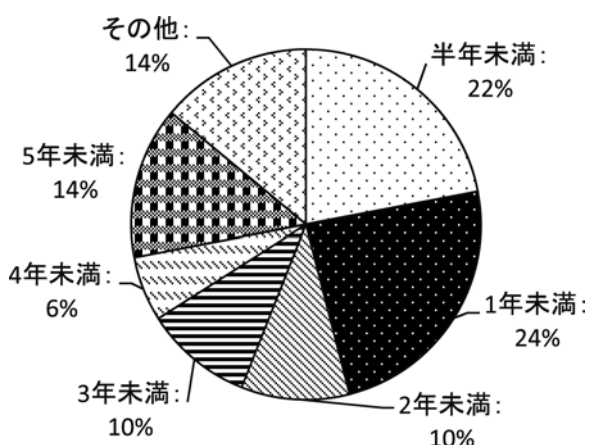


図2 利用年数(単位: %)

2. 「夢のみずうみ村A」に関する調査結果

2-1. デイサービス利用のきっかけ

「夢のみずうみ村A」利用のきっかけは、介護保険サービス利用開始の窓口ともいえるケアマネジャー(介護支援専門員)からの紹介は9人で、市町村発行の介護保険サービス利用の冊子等は3人であり、公的機関からの紹介は「その他」を除いた全体の約19%である(表3)。また、デイサービスを利用している友人や知人の紹介によるものが12人で、家族の勧めにより利用を始めたのが17人であり、所謂「口コミ」による利用開始は他を除いた全体の約62%で半数以上を占めている。

さらに、本人自らがデイサービスを見学して「利用を決めた」のは6人で、「自己選択」「自己決定」を利用のきっかけにしている。

表3. デイサービス利用のきっかけ(単位:人)

ケアマネ紹介	9
デイの友人・知人	12
家族勧め	17
広報紙等	3
見学して	6
その他	14

2-2. 「自己選択」「自己決定」のプログラムについて

「夢のみずうみ村A」のプログラムの内容や種類に満足しているかを問う質問には、アンケートに答えた42人中、37人が満足している(表4)と答えている。

理由として、「好きなことができる」12人、と心理的な気持ちの評価している者と、「リハビリになる」と15人が身体的な効果を期待している。

その内容(複数回答可)を見てみると、「自分の事は自分で決めたい」24人、「自分で決めるのが楽しい」13人、「脳活性に良い」12人が、これらの項目を評価している(全体の77%)。また、「難しい」「面倒」との項目を選んだのは各2名である(図3)。

自由記載では、「自分で好きなものをする」と満足する「家でも自由だから自由が良い」「ユーメは頭と体の体操になる本当にここはよい」との評価や「何時に何をするか自分で書いて覚える」等自己選択に対する自分なりの工夫等が目立つ。さらに「他のデイサービスと変わったところが、いいところ」など他のデイサービスと比較した客観的な意見もある(1名)。また、希望として、買い物の不自由から「外(街)へ行きたい」「買い物へ行きたい」などの意見が少数あった。

「話をする相手がいない」との日常的な悩みを記入した利用者、さらに、「なにをするわけでない」という意見も極少数あった。

表4. 満足内容(単位:人)

好きなことができる	12
リハビリになる	15
その他	2



図3 自分でプログラムを決めることについて(単位:人)

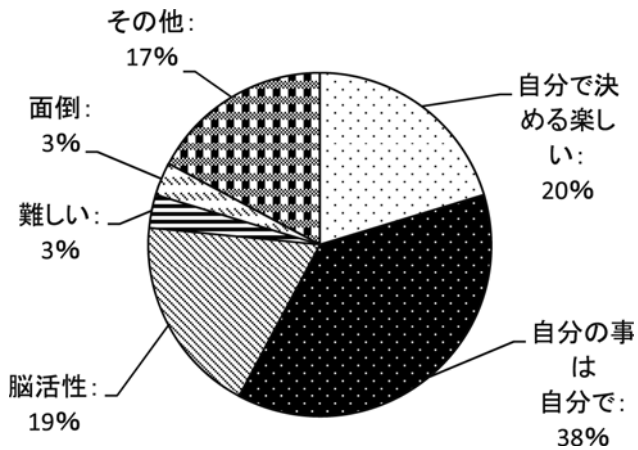


図4 自分でプログラムを決めることについて (単位:人)

2-3. 施設内通貨ユーメのプログラムについて

施設内では、村内通貨「YUME (ユーメ)」を使用している。各プログラムに参加する時はユーメを支払う。例えば、各種教室やリハビリプログラムに参加したり、コーヒー代の支払いなどである。また、ユーメを手に入れるためにも工夫がなされており、デイサービス利用開始日には、お祝い金として財布・村の住民票(名札)と一緒に一定金額が給付されたり、生活の中では、自分でバイタルチェック(血圧測定、検温)をする、リハビリの中で、クイズに答えるなどである。ユーメを使うことの効果として、お金が必要なことに気付くための注意力、理解力、所定の箱にお金を支払う場所の認知、手指・上肢の運動能力などの向上が考えられる。^{注2)}

実際にユーメの活用について楽しめているかを問う質問には、とても楽しんでいると回答したのが、27名中11名、楽しんでいると回答したのが9名であった。また、あまり楽しめていないと回答したのが2名、楽しくないと回答したのが1名であった。(表5)

表5. ユーメ活用の楽しみ (単位:人)

とても楽しんでいる	11
楽しんでいる	9
あまり楽しくない	2
楽しくない	1
分からない	4

さらに、ユーメの活用を通して、在宅での生活に自信が持てるようになったかを問う質問には、とても自信が持ったと回答したのが29名中2名、自信が持ったと回答したのが14名であった。また、あまり自信が持てないと回答したのが1名、変わらないと回答したのが4名であった。(図5)

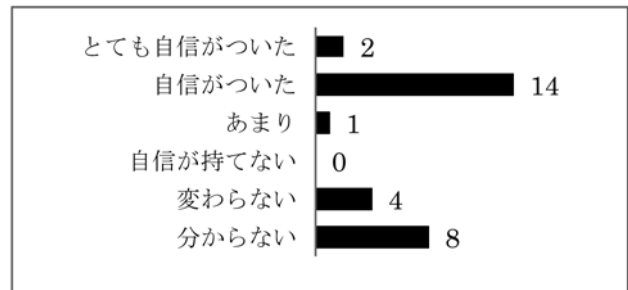


図5 生活への自信 (単位:人)

2-4. デイサービスの魅力について

「夢のいずみの村A」の魅力について、「とても満足」が19名、「やや満足」が14名と答えており、不満と答えた利用者はいない。(表6)

満足の内容についての解答(複数回答可)は、「職員の対応が良い」15名と最も多い回答である。次に「バイキング形式の食事」14名、「他の利用者に会える」9名、「入浴」9名と続き、「デイサービスのプログラム」5名、「ユーメの使用」6名、「バリアフリー」3名と施設の独自性を評価している。また、好きなプログラムはウォーターベッド、あん摩、マッサージ、パソコン、脳トレ、カラオケ、ユーメを使用したカジノ等が挙げられている。

友人関係では、デイサービスの参加により友人が「とても増えた」と答えた人は12名、「増えた」は21名で多数の利用者が友人を増している。(表7)

自由記述には、「自分で選ぶのが楽しみ」「自分の好きなものが何でもできるのがよい」、等の肯定的な意見が目立つ。

今後、新しく取り組みたいプログラムの希望は、「歌のプログラムがあったほうがよい」「専門家の話が聞きたい」等の意見があった。

表6. デイサービスに満足 (単位:人)

とても満足	19
やや満足	14
やや不満	0
不満	0
分からない	2
その他	1

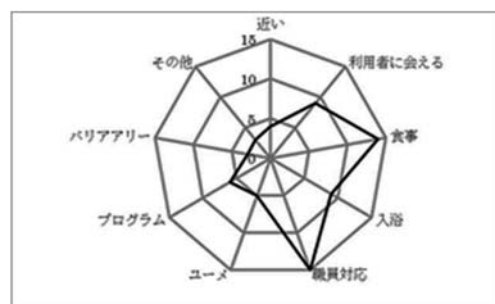


図6. デイサービスの魅力 (複数回答単位:人)

表7. 友人・知人が増えた（単位：人）

とても増えた	12
増えた	21
あまり	5
変わらない	10

2-5. まとめ

デイサービスの魅力は、自宅から施設が「近い」より「職員の対応」「バイキング形式の食事」「デイサービスのプログラムの内容」とのデイサービス施設自体の「質」を魅力として挙げている利用者が多い。

デイサービスの利用者が、80歳以上が半数以上を占め、高齢であっても「自分で選ぶのが楽しみ」、「自分の事は自分でできたい」と述べ介護保険制度の原則である「自己選択」「自己決定」を体現している。

このことは、デイサービスの評価や今後、デイサービスはどうあるべきかの指標を示すものの一つとなるであろう。

また、カジノなどは、「もっと深い次元で総合的に福祉と遊びの融合がなされている」との評価もあり³⁾、「やる気」「本気」を引き出している。

さらに「友人・知人が増え」高齢者の付き合いの広がりを見せている。「プログラムを通じて同じ趣味をもつ友人と出会えた」と推測される。

3. 施設内にバリアがあることについて

3-1. バリアフリーについて

「夢のみずうみ村A」は、一般的なデイサービス施設と異なり、段差や坂など日常生活で遭遇するバリア（障壁、障害物）を意図的に配置している。休憩の椅子セットの前には階段と、フローヤや入浴室へ行くのにも段差やスロープ、コード等がある。デイサービス利用者が自宅から持参する入浴時の着替えなど個人の持ち物は、整理タンスの引き出しに入れ、両手で取手を握り引き出すというリハビリ効果となっている。利用者は、手摺代わりの整理タンスや棚を伝って段差の上り下りを行っており、自然と下肢上げ下げのリハビリとなっている。バイキング方式の食事では、トレイ、箸、皿など自分で用意し、食後の片付けも行う。

これらのことが、「バリアフリー」と呼ばれている。

施設内に段差やコードがあることについての不安等を尋ねた結果（複数解答可）、「自宅と同じだから不安はない」と答えた利用者は26人、「それなりの配慮があるから安心」23人、「リハビリになる」12人とバリアフリーを肯定的に受け入れている。さらに、自由記載では「押し車を利用しているから、気にしない」「車いすだが、バリアフリーについて不満はない」と答え、押し車、車いす利用者でも安

心であることを書いている。

バリアフリーについて、転倒不安と答えた人は5名おり、転倒したと答えた人は2名である。

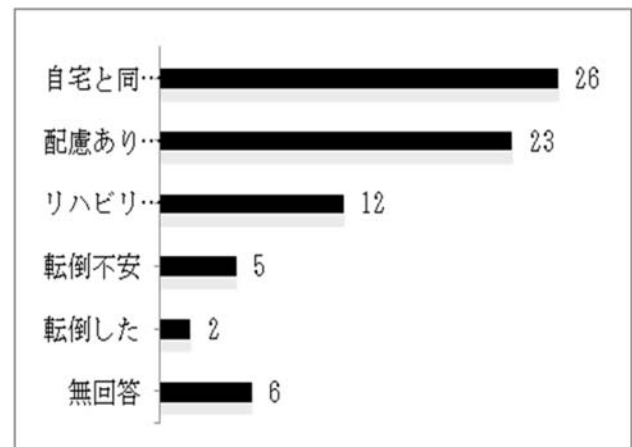


図7 バリアフリーについて（単位：人）

3-2. まとめ

施設内のバリアフリーについて「自宅と同じだから不安はない」と答え、自宅の環境を克服するためには、デイサービス施設でもバリアがある方が良く述べている。

高齢社会白書（平成25年度版）では、65歳以上高齢者の屋内事故の発生場所として「居室」45%、「階段」18%、「台所・食堂」が17%と高く、屋外より住宅内での事故発生が多い。日中を長く過ごす居間など障害物の少ない場所での転倒防止こそが必要である。

「夢のみずうみ村A」のバリアフリーは、全国フランチャイズ「夢のみずうみ村」の藤原理事長が作業療法士の経験から「環境をコーディネート」した発想から生まれた。「できることは自分でやる」「できる動作」を訓練して日常的に“している動作”にする」という考え方の基、このような施設の作りにして、それぞれの自立する力を引き出すことを目標にしている。この基本には、国際的ICFの概念があり、「心身機能・構造（機能障害）」「活動（活動制限）」などが、「環境因子」等と深くかかわり「相互作用」で「健康状態」に好作用を与えると示されている⁴⁾。「環境因子」をあえてバリアフリーにするのではなく、介護施設には相応しくない「段差」や坂、階段、手すりなどの障害や困難をあえて作り、入居者にリハビリの一環としてこれらを克服し、慣れていってもらいリハビリ的要素が含まれている。

利用者も「one step one goods」などの「それなりの配慮があるから安心」と答え、「リハビリ」の一環と捉えている。

V. 考察

「自己選択」「自己決定」を「ニーズ」と「デマンド」から捉えてみると「デマンド」は本人が望む主観的要望で、「ニーズ」は客観的に本人が必要なことであり、また、介護保険制度上では「要介護者の生活全般の解決すべき課題(ニーズ)」である。

「夢のみずうみ村」の利用者はプログラムを「自己選択」「自己決定」するにあたり、「これがやりたい・したい」という主観的ニーズから職員の計画や誘導等により、介護やリハビリの面から必要な客観的ニーズへと移行しているとうかがえる。“できる動作”を訓練して日常的に“している動作”にすることになるであろう。

また、「自己選択」「自己決定」は多くの人が同じプログラムを選択することもある。今回の調査でも好きなプログラムは「ウォーターベッド・あん摩・マッサージ」を挙げる利用者が多い。逆に、ごく少数であるがプログラムを「なにもしていない」「何をするわけでもない」と答えた利用者もいる。「なにもしない」ことも「自己選択」「自己決定」であるが、このような状態が続く心配はないであろうか。

全体的には、「夢のみずうみ村」利用者の「自己選択」「自己決定」の満足度は高く、バリアフリーについても肯定的である。「夢のみずうみ村」取り組みは、「平成25年版高齢者白書」のコラムでも取り上げられ、今後さらなる広がりが期待されている⁵⁾。

また、介護保険の施設評価には、要介護度が改善したか、との結果も大切である。現行の介護保険制度では、要介護度が改善した場合、報酬が減額するという深刻なジレンマがある。

このことを改善し、利用者の要介護度を下げた事業者は、介護報酬が優遇されるという制度の徹底が必要である^{注2)}。

VI. 謝辞

本研究をまとめるにあたり、調査にご協力頂きました「夢のみずうみ村A」デイサービスセンターの職員、ご利用者の皆様に深く感謝申し上げます。また、訪問調査、集計に協力頂いた鹿児島女子短期大学非常勤講師の植原和代先生に感謝いたします。

注

注1) 「夢のみずうみ村A」デイサービスでは実施していない。

注2) 政府の未来投資会議は、介護保険で提供できるサービスに「自立支援介護」という枠組みを新たに設け、高齢者の要介護度を下げた事業者の介護報酬を優遇

する制度の導入を検討するよう求めている。一部の自治体では、要介護度改善に対する「奨励金」の支給を始めている。東京都品川区、神奈川県川崎市など。

引用文献

- 1) 厚生労働省ホームページ「平成25年介護サービス施設・事業所調査の概要」
- 2) 夢のみずうみ村ホームページ <http://www.yumenomizuumi.com/>
- 3) 小野憲夫：<http://d.hatena.ne.jp>
- 4) 諏訪さゆり『ケアプランに活かす ICF の視点』日総研 2005年
- 5) 内閣府「平成25年度版高齢社会白書」コラム1 夢のみずうみ村～生活力回復を促す介護～

参考文献

- (1) 内閣府ホームページ <http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2016/gaiyou/pdf/1s1s.pdf>
- (2) 厚生労働省ホームページ <http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/kaigo/service13/dl/tyosa.pdf>
- (3) 高齢社会白書内閣府2015年版
- (4) 福島斉「屋内バリアフリーは寝たきりを増加させる」学会誌環境創造 第16号 (2012, 11)
- (5) 佐藤幹夫『人はなぜひとを「ケア」するのか』岩波書店 2010年

(2016年12月2日 受理)